

ツイッターを使用したつぶやき作詞法の開発

久原泰雄

インタラクティブメディア学科

Development of a Method of Writing Lyrics Using Twitter Tweets

KUHARA Yasuo

Department of Interactive Media

(Received October 31, 2016 ; Accepted December 22, 2016)

キーワード：ソーシャルメディア、SNS、ツイッター、作詞方法、コンピュータミュージック

Abstract

In this paper, I propose the “tweet lyric writing method,” which is a method of writing lyrics using Twitter tweets. Recently, many original songs are posted on video-sharing websites and many users not only watch them but also compose music because of the technologies of digital audio workstations such as prominent synthesizers and sequencers. Despite the progress of digital music, for a sound creator, it is rather more difficult to write lyrics than to compose music. On the other hand, many people post text messages on social media about their ideas and feelings in daily life. I noticed that the text messages posted are similar in subject to lyrics and developed a method of writing lyrics using Twitter tweets. In this method, users review their Twitter tweets and analyze their situation and feelings when they posted them. Next, they re-describe them in detail using more concrete words. Finally, they refine the words to poetic description. I applied this method in my seminar on song composition. As a result, many students have acquired the ability to write lyrics to their original songs employing the tweet lyric writing method.

1. はじめに

これまでインタラクティブメディア学科では、サウンド演習 I、II においてコンピュータによる音楽制作を指導してきた¹⁾。1 年次に、基本的な MIDI 打ち込みによる楽曲制作や HTML/CSS による Web サイト制作を習得した後、2 年次に、作詞・作曲・ボーカル録音・編曲・編集・加工・ミキシングなどデジタル・オーディオの技術を学び、オリジナルの歌楽曲を制作する²⁾。2003 年以来、いくつかの作品をコピーレフトまたはクリエイティブ・コモンズのライセンスによって公開してきた^{3,4)}。

2015 年 12 月には芸術学部大学公開企画として「サウンド演習 II 開講 10 周年記念ベスト・セレクション 2005-2015」を実施し、作品を展示した⁵⁾。この企画では、展示会場の壁面に音楽ムービーを上映した。サウンド演習で制作する作品は、サウンドのみの楽曲であるが、大学公開企画に合わせてエフェクト映像、楽曲イメージ画像、歌詞字幕スーパー、スペクトルアナライザーなどを含めた音楽ムービー作品として再構成した。結果として、学外の来場者を含めて、多くの方に作品を鑑賞していただき、学生の楽曲を学内外に広く示すことができた（図 1 参照）。このようにサウンド演習は、楽曲制作を指導す

る科目として、ある程度の成果を得てきた。実際にサウンド制作の演習は、需要が大きく、学生の制作意欲も高い。

さて、サウンド制作の中で、ポピュラーソングの存在は大きく、そこには歌詞の制作が含まれている。作詞は、歌曲の制作の中で重要であるにもかかわらず、サウンド志向の学生にとって、苦手意識が強く、挑戦となることが少なくない。元来、ポピュラー音楽の分野では、作詞、作曲、編曲、演奏、歌唱は分業が基本であった。しかし、1960 年代にはジョン・レノン、ポール・マッカートニー、ボブ・ディランなど、自作自演のミュージシャンが登場し、人気を博した。これらのミュージシャンは、大規模編成のオーケストラではなく、ギター、ピアノ、ベース、ドラムなどの簡易なバンド編成で自作の音楽を演奏した。このように、作詞、作曲、編曲、歌唱をすべて自分たちで行う自作自演スタイルが定着するにつれ、従来のテレビ局専属のオーケストラ伴奏のもとで歌手が歌う生放送の歌番組のスタイルが崩れていき、テレビにおける歌謡曲が衰退していった要因の一つとされている。

とはいえ、レコードや CD など楽曲のパッケージ流通の際に必要な録音、オーディオ加工編集、ミキシング、マスタリングなどは専門の音響エンジニアが行うの



図1 大学公開企画「サウンド演習Ⅱ 開講10周年記念ベスト・セレクション」の展示

が常であった。ところが、パーソナルコンピュータやシンセサイザーの性能向上に伴い、DTM (Desk Top Music) や DAW (Digital Audio Workstation) の普及によって、音響エンジニアの仕事がすべてパーソナルコンピュータで完結するようになると、個人がオリジナル楽曲のパッケージを生産することが可能になった。さらに、インターネット上でソーシャルメディアが普及するにつれ、自作自演の楽曲を投稿サイトに発表し、コンテンツ交換することが一般的になった。また、音楽ツールが性能向上し、楽曲制作手法のチュートリアルがインターネット上で容易に入手できるようになるにつれ、今まで楽曲を鑑賞するだけであったユーザが自分で楽曲を創作するケースが増え、作品の品質も向上していった。

2003年にヤマハが開発した歌声合成技術⁶⁾に基づくボーカロイドが登場し、2007年に初音ミクがヒットすると、音楽制作に新しい潮流が作られた。ボカロでさえ MIDI 打ち込みにより制作することが可能となり、楽曲が個人ベースのコンピュータ1台で完結するようになった。歌声合成技術の研究の歴史は長く、決して目新しいわけではないが、ボーカロイドの社会的影響は音楽産業の構造を変えるほどのインパクトがある。ボーカロイドの楽曲はボカロ曲として1つの音楽ジャンルとして認められ、動画投稿サイトで誰もが自由にアップロードやダウンロードされて広がってきた。権利で縛られた窮屈なコンテンツではなく、自由に二次利用できる作り手と聴き手に優しい環境で創造がリサイクルされていく。既存の曲を素材に新しい楽曲を作る二次創作は作り手だけでなく、ユーザの意欲を刺激し、創作の連鎖反応を誘発する。従来は音楽を聴くことを趣味としてはいても、作曲となると敷居が高く困難であった。一方、ボーカロイドは歌詞とメロディを入力し、歌声ライブラリに歌わせて曲を作っていく。音楽理論を知らなくても、メロディは誰でも心の

中に育まれており、この心のメロディをボーカロイドという新しい音楽語法によって表現し、作曲する。ボカロ曲が作曲を始めたいという動機付けの要因になっていることも不思議ではない。今後、創作者の層が拡大し、個性的なコンテンツが続々と創作・発信されることが期待される。このような潮流において楽曲の中で歌曲の占める重要性が増している。ボーカロイド楽曲は基本的に歌詞のついた歌である。動画投稿サイトにアップロードされているオリジナル曲で詞が付いた歌曲は人気があり、歌手キャラクターと連動した音楽動画として多くの作品が制作されている。作詞は、編曲やミックスなどと比較して、著作権的にも重要である。

このように、サウンド制作において、歌詞の存在感は大きく、作曲と同様に作詞の能力を持つことは大きな意味がある。しかし、音楽制作に関心があったとしても、その対象はほとんどが曲作りであり、作詞を苦手とする学生が多いのが現状である。この現状に対して、筆者は、ソーシャルメディアを使用した作詞方法を提案し、実践してきた。ソーシャルメディアが普及するにつれ、多くの人がメッセージをテキストで配信している。そこには、日常の何気ない出来事、感情、気持ち、言葉、行動が含まれており、自己表現の場として利用されている。この事実を鑑み、ソーシャルメディアを利用して作詞することは有効であると考え、授業にて実践した結果、ある程度の成果を得ることができたので本論文で報告する。

2. 作詞とソーシャルメディア

2-1 作詞の一般論

楽曲における詞は、文学作品の詩と類似しているが、意味が異なる語である。一般的には、メロディをつけて歌われるものを詞と呼び、言葉として読まれるものを詩と呼ぶが、本論文においては、明確な区別をしない。詩

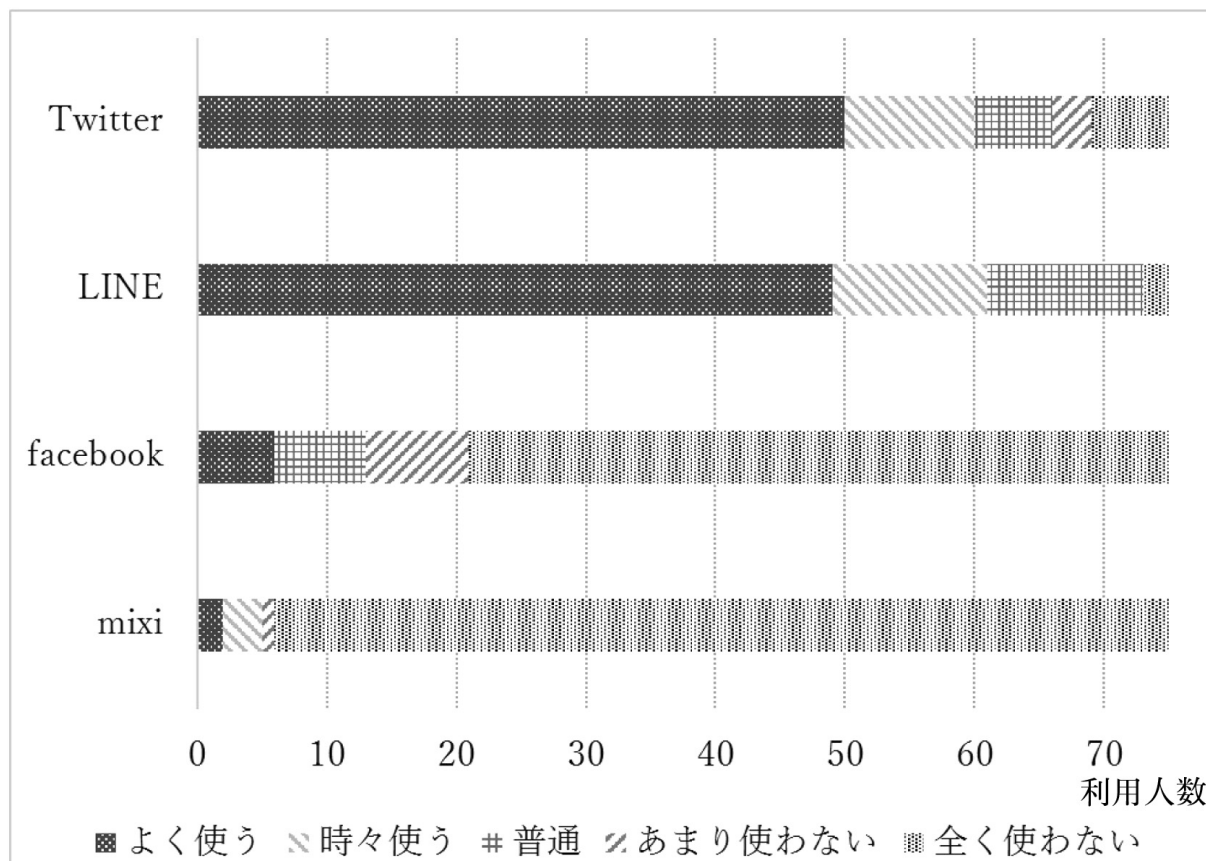


図2 インタラクティブメディア学科1年生のSNS利用状況

として書かれたものにメロディをつけることもあれば、詞として書かれたとしても、印刷されたものとして読まれることもあるからである。また、詩にはない詞の特長として、文字なしの音だけで伝える場合が多いことがあげられる。しかし、最近では多くの歌楽曲が字幕付きミュージックビデオとして視聴されることを考えると、詞が文章として読まれることは決して少なくない。また、詞はメロディにのせることが前提であり、言葉のイントネーションと音程変化、音の時間長と言葉の組み合わせなど歌いやすさや聞きやすさなどが考慮されることがあるが、字幕付き動画として視聴されることが多い昨今において、その必要性は少ないといえる。

歌曲のテーマとして扱われる題材は、ありふれた日常生活、作者の想像した架空のストーリー、映画音楽のような具体的な要求に基づく場面、社会に対するメッセージなど、様々である。曲は作れるが詞が書けないという人にとって、まず取り組むべき試みは、身近な日常生活から題材を得て、詞を作ることである。私たちの身の回りには、多様なことが起こっており、そこから日々影響を受け、心に響いているが、通常はそれに気づいていないだけである。本手法では、日常生活における身近な出来事から伝えたい感動を見出し、詞として表現すること

を試みる。

2-2 ツイッターの特徴

現在、インターネット上には、様々なソーシャルメディアがあり、多くの人が利用している。インタラクティブメディア学科では毎年、新入生に対して情報テクノロジーに関するアンケートを行っている。例年、ソーシャルメディアの中でラインとツイッターの利用率が高い。2016年度のインタラクティブメディア学科の1年生を対象に行ったアンケート調査（有効回答数75件）によると、ツイッターとラインの利用率は9割程度と高いのに対して、フェイスブックとミクシィは低い利用率であった（図2参照）。

ラインはグループ間や個人間でのメッセージの交換が主な目的であり、既知の人間関係内でなされ、双方で相手の素性が分かっている者同士の情報交換である。一方、ツイッターは、特定の相手を想定せずに、公に自分の思いや気持ちを表現する場である。この点で、言葉による公の表現である詩と類似性がある。またツイッターは、本名を使わずハンドルネームで投稿することができるため、いくつかのアカウントを使い分けている例も多い。反応や拡散も早く、自由に発言できる場として活用され

ている。

3. 作詞の方法

ソーシャルメディアの特徴を鑑みると、言葉による公の自己表現である点で、作詞に応用することができると考えられる。本論文では、高い利用率、オープン性、手軽さなどの特徴を持つツイッターを利用したつぶやき作詞法を提案する。つぶやき作詞法では、書き込み式のワークシートを使用している。自分のツイッターへの書き込みを振り返り、分析し、表現を深めて、詩的表現を加え、詞として完成させる流れとなっている。以下、順を追って説明する。なお、ツイッターへの書き込みは一般的にツイートと呼ばれることがあるが、本論文では、「つぶやき」と表記する。

3-1 ステップ1：ツイッターによるつぶやきの収集

最初のステップは、過去の自分のつぶやきの収集から始める。そこには、些細なつぶやきから意味深長なつぶやきまで様々な内容が含まれている。ありふれた些細なつぶやきであったとしても、その背景には、深い感情が込められていることが少なくない。誰にでも起こり得る経験は、聴く人の共感と呼ぶ。感動は、個性よりも共感から生まれることが多い。誰もが共感できる部分と作者独自の個性が表れる部分のバランスが取れているなら、人に感動を与える優れた作品となり得る。その点で、日常生活に関するつぶやきは、詞の題材の宝庫と考えられる。

まず、つぶやいた時と場所を明らかにする。ツイッターには、時間と場所が記録される機能があるので、それを活用する。次に、集めたつぶやきの背後にある自分の気持ち、感情を自己吟味する。人間には感情があり、日々、いろんな出来事に気持ちが動かされている。この感情は、大きく喜怒哀楽の4つに分類される。そこで、集めたつぶやきが各々の感情と関係しているのかをワークシートに記す。つぶやいた時には意識していないことも多いが、改めて喜怒哀楽に分類することで、つぶやいた時の気持ちを自己分析するきっかけとする。図3に収集したつぶやきを記述するシートの例を示す。

日時	場所	喜怒哀楽	つぶやき

図3 ステップ1 つぶやき収集シート

3-2 ステップ2：つぶやきに関する場面の分析

収集したつぶやきの中から、いくつかを選択して候補とし、さらに分析を深める。ここでは、つぶやきの場面を具体的に明らかにする。すなわち、「いつ」、「どこで」、「誰が」、「何を」、「なぜ」、「どのように」という5W1H (When Where Who What Why How) を具体的に記述する。時と場所については、すでに、ステップ1で収集しているが、ここでは、より詳細に記述を深める。たとえば、季節、時間帯、土地柄、土地の名称、風景などである。日時に季節感が加わると、より詩的になる。俳句と川柳の違いは、季語があるか否かにあることから明らかである。土地の固有名詞は、歌詞の中で用いられることが多く、聴き手に具体的な場面を想起させたり、その土地の固有名が持つイメージを付与させたりする効果がある。

「誰が」については、自分に関する事か、他人に関する事かなど、関係する人物について明らかにする。小説や脚本における登場人物を明確にすることに相当する。「何を」については、行った動作、発言した言葉などを具体的に記述し、実際に起こった出来事を明らかにする。「なぜ」では、言動の理由を分析する。発せられた言葉や動作は、人の内面にある感情の表れであることが多いため重要である。また、その感情を抱くきっかけとなった出来事「何を」と関連させながら分析し、言葉として記述する。「どのように」は言動の行い方の程度を表しており、行動主の感情に左右される。例えば、同じ「泣く」という動作でも、激しく「号泣する」と、静かに「しくしく泣く」のでは、大きく異なる。図4につぶやきに関する場面の分析シートの例を示す。

いつ	
どこで	
誰が	
何を	
なぜ	
どのように	

図4 ステップ2 つぶやきに関する場面の分析シート

このステップで重要なのは、ある「きっかけ」が引き金となって、ある「気持ち」を抱き、特定の「言動」となって表れるという、場面における人の思いと心と行動の一連の流れを理解することである。この分析は、小説を読み解く手法に似ており、文章読解力の向上にもつながる。

3-3 ステップ3：五感に関する具体的な描写

ステップ2で記述した内容を、さらに彩りや表情を豊かにするため、五感、すなわち視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚に関する具体的な描写を加える。人間は五感で外界の情報を取り入れ、様々な精神活動を行っている。色、形、大きさなど具体的な視覚に関する記述が豊かであれば、詞を聴いた時に情景が目浮かぶ。写真を添付したつぶやきの場合、画像をできるだけ具体的に言葉で表現してみる。絵から言葉への変換を行うことによって、歌を聴く人が言葉から絵への変換を行うことが可能となる。聴覚としては、聴いた音、聞こえた音、背景で流れている音楽、環境音などを具体的に記述する。嗅覚としては、におい、香り、味覚としては、味、歯ごたえなど、触覚としては、温度、湿度、雰囲気、場の空気感、手ざわり、肌で感じたことなどがあげられる。五感のうち、視覚と聴覚は、理性的、論理的な刺激であることが多いのに対して、嗅覚、味覚、触覚は、野性的、本能的な刺激であることが多い。また、心理的な気持ちを比喻によって五感で表現することもある。例えば、「初恋は、甘くて酸っぱい」などである。図5に五感に関する描写シートの例を示す。

見えたもの 色、形、大きさ	
聞こえた音	
におい、香り	
味 比喻も含めて	
触覚 温度、質感、空気感	

図5 ステップ3 五感に関する描写シート

このような五感に関する具体的な描写は、聞き手の脳裏に明確な印象を与え、聴き手の記憶と関連付けられ、心に響くものとなる。

3-4 ステップ4：思い、心、感情（喜怒哀楽）の描写

思い（mind）とは頭脳に宿り、知的な考えからなる。一方、心（heart）は心臓に宿り、気持ちや感情からなる。思いや考えは、気持ちや感情に影響を与え、気持ちや感情は、人を特定の言動へと導く。詩や詞において、特に心に関係する気持ちや感情表現はとても重要な位置づけにある。内なる感情やそれを外に表現する言動は、その人物の考え方、人となり、人物像を表すからである。自分が考えたこと、感じたこと、気持ちを表現して、聴き手に伝える描写が必要不可欠である。

人間が抱く感情は、古くから喜怒哀楽の4分類がよく用いられるが、本手法では、この分類を基本として、以下の考察を加える。

・気持ちの直接的な表現

喜怒哀楽に直結する言葉を用いて感情を表現する。

例：嬉しい、腹がたつ、悲しい、など。

・気持ちを表す仕草、行動、表情、言葉

気持ちと直結した言動には、気持ち言葉がなくても、感情を表現できる。

例：小躍りする、腕が震える、顔を赤らめる、など。

・複数の感情の混在

相反する感情が同居することもある。複雑な人間の感情を表現する。

例：恥ずかしいけど、嬉しい、など。

ある出来事をきっかけとして感情が変化する場合がある。きっかけ、気持ち、言動の一連の流れはステップ2の場面の分析で確認するが、初めに抱いた気持ちや感情が変化する場合、変化前の気持ち、きっかけ、変化後の気持ち、言動という流れになり、そこにはストーリー性が生まれる。短い詩の場合、ストーリー性がない場合も多いが、1番、2番、3番とコーラスを重ねるにつれ、感情が変化するストーリー性を持たせることがある。変化前と変化後の感情が対照的である場合、ドラマ性が生まれる。例えば、マイナスの感情が、ある出来事をきっかけとしてプラスの感情に変化するなどである。感情の変化は人間の生活には付き物で、詩の題材として適している。図6に思い・感情に関する描写シートの例を示す。

思い 考えたこと 思ったこと	
思いに起因する言動	
心、気持ち 感じたこと 喜怒哀楽	
心に起因する言動	

図6 ステップ4 思い・感情に関する描写シート

3-5 ステップ5：詩的表現によって調整する

ここまでで、日常の些細なつぶやきを分析、考察して、表現を広げてきたが、最後のステップとして、これらの言葉を詩の特徴をもった表現に変換する。

1) 短くて簡潔な表現にする。

ステップ4までで作成した文章は、かなり文字数が増えており、詳細な記述となっているが、これから必要のない部分を削り、くどくどと説明しない、簡潔な表現に精錬させる。この点で、詩は論説文や随筆などと対照的である。優れた詩の特徴は、多くを語らず、行間で語り、聞き手に想像力を働かせる。

2) 必要に応じて脚色を加える。

事実は、それ自体が興味深いことが多いが、事実に正確に即している必要はない。誇張や願望など必要に応じて、事実に対して自由に脚色を加えることができる。

3) 詩的表現技法である倒置法、体言止め、比喻、擬人法、反復、対句などを用いる。

詩でよく用いられる表現技法を用いる。自分の考えや気持ちを直接的に表現することに躊躇する場合には、比喻を用いることが有効な手段である。

4) メロディにのせるための言葉の調整

8小節の曲に当てることを想定した歌詞のプロトタイプを作ることを試みる。簡潔に、1小節につき4文字から8文字程度で歌詞を書く。なお、文字数は厳密に制限する必要はない。言葉のリズムに応じて適宜、七五調、五七調などの音数律を適用する。なお、七五調は、唱歌、童謡、軍歌、応援歌、歌謡曲などで頻繁に用いられている。

上記の点を鑑みて調整された詞のプロトタイプシートを図7に示す。

1
2
3
4
5
6
7
8

図7 詩的表現に調整された詞のプロトタイプシート

ここで仕上がった詞はあくまでプロトタイプであり、実際に曲を制作する段階で何度も調整される。

3-6 感情表現に関する補足的考察

文字による感情表現を豊かにするには、人間の持つ様々な感情を分類し、適切な語彙を用いることが大切である。そのためには細分化された感情について、豊富な語彙で表現する必要がある。感情表現に関する語彙を広げるためには、類義語辞典などで気持ち言葉の類義語を調べ、意味やニュアンスの違いを理解することが大切である。この点で、詩人や作家などの文学作品は大いに参考になる。

感情表現辞典⁷⁾は、近現代の作家179人の作品806編から喜怒哀楽の心理を描いた多種多様な用例が収録されており、表現したい感情に関する言葉の選択をする際に参考になる。心理学者ブントは、感情を心理学的に、快・不快、興奮・沈静、緊張・弛緩という3軸に分類する三方向説を提唱した。この3軸に憂鬱、悲嘆、当惑、歓喜、嫌悪、希望、恐怖、不安といった下位情緒をそれぞれの方向に位置付ける方法も論じられている。ただし、この分類は心理学的には適切であったとしても、必ずしも文章表現になじむとは限らない。そこで感情表現辞典では、喜怒哀楽の4分類を元にし、実際の文学作品の使用例から、喜・怒・哀・怖・恥・好・厭・昂・安・驚という10の分類を提案している。もちろん、実際の感情は、明確に分類できるものではなく、複数の感情が混合したり、中間的な感情が描かれたりすることが少なくない。そういった例は、複合感情として扱われている。

つぶやき作詞法では、感情について以下の考察を加える。

- プラスの感情か、マイナスの感情か
- 感情の程度： 激、強、中、弱
- 感情と言動の関係
- 感情や言動を表す擬態語
- 複数の感情の混在：うれし泣き、泣き笑い
- 他者に対する感情か、自分に対する感情か

例えば、以下の基本的な感情表現は上記の尺度に応じて、様々な感情表現に細分化される。

1) うれしい

程度 ゆかい、満足、本望、有頂天、心がはずむ、胸を躍らせる

言動 はしゃぐ、浮かれる、嬉々とする、躍り上がる、小躍り、笑み

擬態語 うきうき、にこにこ、わくわく、いそいそ

2) 怒り

程度 かちんとくる、むかつく、しゃくにさわる、激怒、逆上

言動 怒り狂う、いきり立つ、目を三角にする、ふくれる、青筋を立てる

擬態語 いらいら、かっか、ぶんぶん、かんかん、むっと

3) 悲しい

程度

強：胸が張り裂ける、断腸の思い、悲痛、悲惨、悲壮

中：哀愁、感傷、もの悲しい

静：切ない、やるせない、傷心、うれえる、悲哀、心が沈む

言動 泣き崩れる、号泣、すすり泣く、涙にくれる、うなだれる

擬態語 しくしく

4) さびしい

程度 心細い、わびしい、心にぽっかり穴があく、さびれる、孤独、一人ぼっち

擬態語 がらんと、ひっそり、しょんぼり、しんみり、ぼつんと

5) こわい

程度 おびえる、不気味、脅威、おっかない

言動 震える、すくむ、身の毛がよだつ

擬態語 おどおど、びくびく、おそるおそる、ぞっと

6) はずかしい

プラス： てれくさい、くすぐったい

相手に対してマイナス： 面目ない、顔向けできない、決まりが悪い

自分に対してマイナス： 恥さらし、みっともない、みにくい、屈辱、恥辱

言動： 赤面、はにかむ、はじらう

上記の気持ち言葉は例にすぎないが、これら以外に感情表現に関する語彙を増やし、上記の軸にしたがって分析し、活用することが作詞には重要である。

4. 作品事例

学生のワークシートと完成楽曲の事例を紹介し、作品を分析する。

4-1 ワークシートの制作例

以下に、インタラクティブメディア学科の学生作品の一例を取り上げる（一部改変）。

ステップ1 ツイッターによるつぶやきの収集

日時	場所	喜怒哀楽	つぶやき
5月	自宅	哀	地震が起きるとりあえず猫を守りに行くわが家
11月	自宅	喜	風呂場行くと大体こうやって私が風呂入るの待ってる
11月	自宅	喜	きくたも来た
9月	自宅	喜	めっちゃこっち見てた
帰宅時	玄関	喜	猫がいつも出迎えてくれる
平日午前	寝室	喜	猫とベッドで一緒にごろごろする

自宅の飼い猫に関するつぶやきが多く収集されている。ちょっとした出来事のたびに、猫に関してつぶやいているので、猫に対する愛情を知ることができる。つぶやきの言葉は、話し言葉や俗語などが含まれており、気さくで飾らない自分の自然な思いや感情が表現されている。なお、いくつかのツイートには猫の写真が添付されている。

ステップ2 つぶやきに関する場面の分析

いつ	部活から家に帰ってきた平日夜10時頃に
どこで	自宅の玄関で
誰が	りんときくたが
何をした	私を出迎えてくれた
なぜ	私が自転車を停めている音が聞こえたから
どのように	足音と鈴を鳴らしながら

ステップ1のつぶやきの中から、帰宅時に2匹の飼い猫が玄関で迎えてくれることに関するつぶやきを選択し分析している。夜遅くても自転車の音に反応して作者を出迎える猫と足音と鈴の音から猫の様子を察する作者との間で心の通じ合う場面が記述されている。なお、「りん」と「きくた」は猫の名前である。

ステップ3 五感に関する具体的な描写

見えたもの 色、形、大きさ	猫 灰色（りん） 大きい 茶色（きくた） 小さい 階段 お風呂（玄関から見える位置にあります）
聞こえた音	猫の首輪の鈴の音 階段を駆け下りてくる音 鳴き声

におい、香り	夕ご飯のにおい 猫のにおい
味 比喩も含めて	
触覚 温度、質感、 空気感	ふわふわ 温かい 気持ちいい ホッとする お風呂に行きたそう

飼い猫が作者を出迎える様子が一層、色彩豊かに描写されている。特に玄関の様子、猫の駆け寄る様子、夕飯時の家庭の雰囲気が視覚、聴覚、嗅覚、触覚などの描写を通してより鮮明に記されている。その結果、情景が目には浮かぶようである。なお、味覚に関する記述はない。

ステップ4 思い、心、感情（喜怒哀楽）の描写を豊かにする。

思い 考えたこと 思ったこと	早く寝たい 課題やらなきゃ 晩御飯なんだろう 今日も出迎えてくれるかな
思いに起因 する言動	急いで鍵を開けてドアを引いた（行動）
心、気持ち 感じたこと 喜怒哀楽	出迎えてくれた 嬉しい
心に起因す る言動	ただいま 撫でる（行動） 抱っこする（行動）

眠気、課題、夕飯など学生としての作者の日常生活で、飼い猫が思いの中で重要な位置を占めていることが理解できる。「ただいま」という言葉、「撫でる」、「抱っこする」という行動は、作者の猫に対する愛情の表れである。作者は飼い猫との交流で癒され、なごみ、心地よい喜びを感じている。

ステップ5 詞として整える

自転車を止めて
ドアに手をかける
聞こえてくるのは
かわいい足音

ドアを開けたら
待ってるふたり
うれしくなって
思わずこぼれた

ステップ4で深めた場面が簡潔な七音を基調とした語

句で詞として表現されている。猫、玄関、夕飯時など具体的な情報が削除されているが、作者と飼い猫の温かい心の交流は十分に表現されている。自転車、ドア、足音などの言葉から、帰宅した自宅の玄関の情景が思い浮かぶ。「ふたり」というのは2匹の猫のことだが、擬人法によって人間の家族のように扱われている。「思わずこぼれた」とあるが、何がこぼれたのかは明記されていない。おそらく「ただいま」というあいさつなのかもしれないが、答えは聞く人の想像に任されている。この文章をプロトタイプとし、曲のメロディと調整しつつ、完成版の詞へと作り上げていく。

4-2 完成楽曲の事例

ツイッターのつぶやきから作られた詞のプロトタイプは、最終的に以下のような作品として完成した。

タイトル：ただいま

作詞・作曲・編曲・ボーカル・録音・編集：すべて本人
コンセプト：いつも家に帰ると、一緒に住んでいる二匹の猫がお出迎えをしてくれます。その情景を歌にしました。「お出迎えがこれからもずっと続いたらいいなあ」という気持ちを込めて、同じフレーズを何度も繰り返す作りになっています。聴いてくださった方が少しでも温かい気持ちになってくれれば幸いです。

歌詞：

ある日の帰り 今日も頑張ったなあ
なんて考えて ペダル漕ぐ

家に着いたら 自転車止めて
耳を澄ませれば かわいい足音

ドアを開けたら 待ってる二人
嬉しくなって 思わず零れた

最近ずっと 忙しいから
前より あんまり 遊べないけど

ドアを開ければ いつも待ってる
嬉しくなって 思わず零れる

ドアを開けたら 待ってる二人
嬉しくなって 思わず零れた

これから先も 私のことを



図8 学生作品のイメージ画像例

二人揃って 待っていてね

イメージ画像：図8の左から1番目の画像参照

イメージ画像（図8の左から1番目の画像参照）から2匹の猫がテーマとなっていることが推察できる。また、曲タイトルを「ただいま」とすることで、歌の場面が帰宅時のひと時のことであることが分かる。プロトタイプと比較して、作者の忙しい日常に対する心情描写が加わっており、猫に対する作者の暖かい思いに関する描写が一層深まっている。作者は飼い猫をかわいがると同時に、そこから安らぎや癒しを得ている。なお、曲は、ウェブサイト [kuhaL@Bo Music Archive^{8\)}](#) にて聴くことができる。なお、参考のため、その他の学生作品のイメージ画像の例を図8に挙げた。

4-3 結果の考察

今回、取り上げた作品事例は、作者が帰宅した時に出迎える猫をテーマにした楽曲であった。ツイッター上の他愛のないつぶやきを分析してテーマを練りだし、かわいがっている飼い猫との暖かい関係がいつまでも継続することを願う気持ちが歌として表現されている。この事例以外にも、旅行先の南の島での出来事、通学に使う電車の経路、つらい気持ちでいるとき夕方の海に向かって叫んだこと、鏡に向かって自分自身について考えていること、雨の休日に自宅でのんびりしているひと時、朝起きたがまだ眠いのでまどろんでいるときなど、様々なツイッターのつぶやきを題材として作品が制作された。当初は、多くの作者は詞が書けないという意識を持っていたが、詞の題材は、日常生活の中に数多く埋もれており、ソーシャルメディアやスマートフォンというツールによって、日々、無意識のうちに文章によって表現している。それを掘り起こし、自己吟味し、具体的な描写を書き加え、詩的表現に仕上げれば、詞は容易に書くことができることを本手法の実践例による作品が示している。

5. 結論と展望

ツイッターのつぶやきには、身近な日常生活、例えば、通勤通学での出来事、自宅でくつろいでいるとき、旅行先での出来事、空想の世界など、実に多様な表現で満ちている。つぶやいている本人は意識していなくても、そこには詩の題材となる言葉が豊富に含まれている。その一方で、自作サウンドコンテンツが盛んに作られるようになり、曲を作ることはできても、詞を書けないと考えている学生は多い。しかしながら、本手法を適応することによって、ツイッターにおける自分の書き込みから詞を作り出すことができる。自分の何気ない書き込みを分析して、場面を明らかにし、五感の情報を加え、そこに隠された思いと気持ちを汲み取り、最後に詞として整えるのである。今後のパーソナルコンピュータやソフトウェアの進歩によって、サウンド楽曲はますます多くの人によって制作されることが予想される。一方、作詞は、そのようなテクノロジーの進歩の恩恵を受けにくい位置にあり、多くの人は文学的才能に依存すると考えている。ボカロ曲など歌詞が必須の楽曲制作者の層が広がるにつれて、作詞を行う方法論はますます需要が大きくなると言える。本手法は多くの人がソーシャルメディアにおいて文章で自己表現をしていることに着目し、ソーシャルメディアの書き込みを分析、発展させて詞を制作する方法論を論じた。また、作詞の方法論を大学の演習科目において実践し、ある程度の成果を得た結果を示した。今後、本手法に改良を加えつつ、引き続き実践し、新たな成果を得たいと考えている。また、ツイッターのみならず他のソーシャルメディアやテキスト発信に注目して、新たな手法を開発する予定である。

参考文献

- 1) 久原泰雄, デジタルコンテンツとインターネットによる音楽作成演習プロジェクトの実験, 東京工芸大学芸術学部紀要, 第9号, 2003, pp25-32
- 2) 久原泰雄, MNG プロジェクト—コピーレフトに基づくデジタル芸術 Web データベース構築, 東京工芸大学芸術学部紀要,

- 第10号, 2004, pp1-7
- 3) 小川正人, 穴山大輔, 久原泰雄, コピーレフトに基づくデジタル芸術コンテンツの Web データベース, 情報処理学会第67回全国大会講演論文集第3分冊, 2005, pp119-120
 - 4) 穴山大輔, 久原泰雄, コピーレフトとオープンソースを適用した芸術コンテンツ Web データベース, 情報処理学会研究報告 [音楽情報科学], 2005-MUS-61, 2005, pp53-58
 - 5) 久原泰雄, サウンド演習 II 開講10周年記念ベスト・セレクション2005-2015, 芸術学部大学公開企画, 東京工芸大学中野キャンパス, 2015
 - 6) 剣持秀紀, 藤本健, ボーカロイド技術論—歌声合成の基礎とその仕組み, ヤマハミュージックメディア, 2014
 - 7) 中村明, 感情表現辞典, 東京堂出版, 993
 - 8) 久原泰雄, kuhaL@Bo Music Archive, <http://www.kuhalabo.net/mng/>, 2003